



第203号

発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会理事長 渡辺 宣裕
 編集人 会報編集委員長 五味 岸夫
 印刷所 須坂新聞社

本校の中核活動

花の町小布施

―栗ガ丘小学校の花作り―

栗ガ丘小学校

同好会に求められているもの

同好会副会長 岡田 哲夫

今、同好会に求められているものは、二つあると思います。

一つは、教師としての専門性を高めるといふことであり、もう一つは、教養を高めるといふことであります。

夏期講演会でどんな講演を望みますか、とアンケートを取ったところ、多くの先生方から、明日の授業に役立つ具体的な指導法の話を聞きたいという要望がありました。

一方、同僚の若い先生からは、複雑な家庭環境の中で苦しんでいる児童を目の前にしたとき、「人間とは何か、人間はどう生きればよいのか」という根本的なことが分からなければ自分は動揺してしまふという悩みも聞きました。

世の中が混沌とすればするほど、教師としての専門性と人間としての教養が求められます。

同好会の良いところは、自

己選択・自己決定ができるということだと思います。「求めよ。されば道は開かれん」という世界です。志を同じくする仲間がいるといふことで、人は強く生きていけます。

また、同好会夏期講習会のまとめを各同好会から出していただきましたが、「高い講師料を払い、有名な先生を呼んですばらしい話を聞いたり役に立つ実技講習を受けたりできたのに、同好会員だけではもったいない。参加する価値があるので、もっと沢山の先生方に参加してほしい」という反省が数多くありました。教養を広げるといふ意味で、アンテナを高くして、興味を湧かした講習会には、ふるって参加していただけたらと思います。経済的にも不安な長い老後を豊かに生きるための趣味や生涯学習にもつながる同好会でもあります。

(森上小)

花の町小布施。小布施の町は、花で彩られています。栗ガ丘小学校では、そんな町の学校としてオーブンガーデンの整備や、一人一鉢で玄関前を飾るなど環境作りをしています。

町内の各所に置かせていただき、町の人や観光客に楽しんでもらっています。



7月14日 暑い中での草取り

中央花壇は、児童会のグリーン委員会が取り組んでいます。苗の世話から始め、全校から歌壇のデザインを募集して植え付けをします。今年「力を合わせ未来へ」のテーマで、みんなで未来に向かっていく気持ちを表現しました。夏休みの間も当番で草取りや水遣りを欠かさず歌壇を完成させ、コンクールで優良賞を受賞しました。(寺尾 充)

教育会だより

- 8・1・3 各同好会夏期講習会
- 8・10 教育会講演会(小布施町勤労青少年ホーム)
- 講師 愛知教育大学教授 志水 廣 先生
- 演題 「確かな学力を育てる授業の創造」
- 8・25・26 日本連合教育会会長崎大会
- (長崎市公会堂)
- 9・7 第4回理事会
- 9・8 郡研究推進委員会⑤
- 9・10 第5回同好会
- 9・13 第5回代議員会
- 10・8 上高井教育研究会(相森中学校)
- 10・12 第5回理事会
- 郡公開研究会 中心講師 田中統治先生(指導)
- ◎国語研究会(常盤中)
- 社会(高山中)、算数(数学井上小)
- 理科(墨坂中)、図工・美術(仁礼小)
- 体育・保健(旭ヶ丘小)、家庭・技家(豊丘小)
- 英語活動(英語森上小)、道徳(高山小)
- 特別活動(須坂小) 特別支援教育(栗ガ丘小)
- 健康教育(小山小)、人権同和教育(東中)
- 10・15・16 郡市科学作品展(シルキーホール)
- 10・18 第6回同好会
- 10・20 信濃教育会全県研究大会(東北信B)
- 北部小・木島平中学校
- 10・27 郡研究推進委員会⑥
- 11・2 信濃教育会全県研究大会(東北信A)
- 戸倉小・戸倉上山田中学校
- 11・14 中間会計監査会
- 11・16 第6回理事会
- 11・19 「信州」教育の日(第4回諏訪大会)
- 11・26 第7回同好会
- 12・1 郡研究推進委員会⑦
- 12・9 第6回代議員会
- 12・13 研究委員長会②
- 12・15 上高井教育会会報第203号発行

学校と地域が互いに学び合う、『共学』の場を目指して 『縦割りによる総合的な学習』の取り組みから

須坂小学校

「…支援していただいた方から、大変だったけど、自分の勉強になった…」というお話をいただき、大変うれしく思いました。これは、「こども21」が未来大学常盤分校実行委員会での須坂市公民館長さんのあいさつの一部です。

須坂小学校では、平成13年度より児童自ら自分の興味・関心をもとに講座を選択し、それをもとに3、6年生の縦割り班を編成し、地域から講師や支援者を募って「縦割りによる総合的な学習の時間」を進めています。

その講師や支援者の方々は、須坂市公民館が組織する「こども21」が未来大学常盤分校実行委員会に所属する各団体や個人の皆さんです。

地域の教育力を高め、家庭や地域の人々が子どもと共に学習（共学）をしていくことを進める市の学社連携・融合事業として、また学校としても「総合的な学習」において地域に密着しながら自ら課題をもち意欲的に学ぶ場として、双方の必要性の接点を共有して成果を上げてきているところです。さらに、その協力体制を、学級や学年による「総

合的な学習」に継続したり発表させたりして生かしてきています。

今年度も、公民館のコーディネートにより多くの支援者の方々を得て、次の8講座を開設しました。

- 1 ボランティアを体験しよう
- 2 カイコの不思議と須坂の歴史
- 3 お年寄りと、昔の遊び・料理に挑戦！
- 4 かぐら・かさぼこ、おはやしにチャレンジ！
- 5 鎌田山や地域の自然を探ろう！
- 6 大昔の須坂の人たちの暮らしを探ろう！
- 7 須坂の歴史と焼き物を楽しもう！
- 8 自然を生かして遊び・工作をしよう！

五、十月の十回、木曜日は1・2年生の生活科の授業も合わせて公開し、地域の方や保護者と共に活動する『くぬぎ祭』も行われ、子どもたちの生き生きとした姿が見



れました。

今後も、このような公民館



援や共学の学習システムにより、子どもたちの学びをより深化・拡充させていきたいと考えています。（天野義孝）

地域と共につくる「わくわく村」

～地域の中で様々な講座にチャレンジ～

高山小学校

高山小学校「わくわく村」は、二年目を迎え、多くの人の力によって、着実に地域の中に根づいてきました。15年度PTAによつて親子「わくわくデー」が開催されました。

このイベントを契機に、翌16年度は「地域ぐるみの子育ての場」への願いのもとに、継続的な活動もできるようにと、「わくわく村」を立ち上げました。

PTAが中心となり、公民館や文化協会等の団体や共に参画を希望する個人有志を募り、学校職員と協力して推進しました。全児童が最低一講座は参加することとし、開催期間を六月の土曜参観日に合わせた「開村式」から秋の「しらかば祭」(総合的な学習の時間の発表の場)までの期間として、休日を中心に、学校や公民館など地域の諸施設を会場として、様々な講座を開催しました。この様子は、PTA発行の『わくわく村だより』や「館報たかやま」の中で、写真や児童の作文等によつて全村に定期的に広報されました。

年度末の関係者による反省



わくわく村 開村式
22の講座スタート

会から、17年度へ向けて、PTA・学校・公民館等の関係者や参画を希望する方々により「わくわく村運営委員会」が立ち上がりました。運営委員長には、わくわく村村長(PTA会長)とは別に、わくわく村を立ち上げた16年度PTA会長に、コーディネーター役として引き続き就いていただきました。こうして、PTAを中心としながら、地域の様々な人々を巻き込んだ地域のネットワークによる「わくわく村」のシステムが構築されてきたのです。

本年度の「わくわく村」も、全22講座のうち多くの講座が終了しました。本年度は、高山太鼓やCM作り講座、フラワールンジ教室、物作り教室(科学編、作物編)、囲碁教室など、数回にわたる継続的な講座が多く開催されました。また多くの学校職員も企画運営、講師として参画しました。これは、学社融合による「特色ある学校づくり」の姿といえます。

今、地域に「わくわく村」が定着しつつあり、連携・融合の形が見えてきました。自立を選択した高山村の「特色ある生涯学習づくり」として、「わくわく村」に大きな期待が寄せられています。

(原 宏)

本校の研究の取り組み

常盤中学校

本校の全校研究テーマは「自分らしく自己を表現していく力の育成」である。陰山英男氏は、「学力をつけてあげる」ということは、自分の心を人にわかってもらおう喜びを、子どもに与えることです。」と『「読み・書き・計算」で学力再生』（小学館）の中で述べている。これは、本校の研究にとっても重要な指摘であると私は捉えてきた。

本校の先生方には、豊かな表現に至るまでのプロセスとして、「揺るぎない基礎力」が必

図工学習の取り組み

仁礼小学校

仁礼小学校では「自ら自信をもって生き生きと活動するにれっ子の育成」伝え合う力を高め、次の学習につなげるための評価のあり方」をテーマにすえ、図画工作・国語・算数の三教科を中心に全校研究を進めてきました。

図工科では図工の学習における児童の実態から「対象への関わりを深め、表したいもののイメージを広げながら、自分の表しを豊かにする図工学習はどうあったらよいか」というテーマを設定し、研究



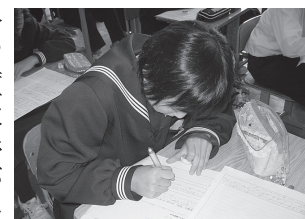
要なことを訴えてきた。必要条件として、読み書き計算の充実が大事なのである。その上になつて、体験学習が積み上げられていく。そして、本校の研究テーマの表現力の育成という十分条件へと繋がっていくのである。本校の若い先生方は、情報機器に

必要なことを訴えてきた。必要条件として、読み書き計算の充実が大事なのである。その上になつて、体験学習が積み上げられていく。そして、本校の研究テーマの表現力の育成という十分条件へと繋がっていくのである。本校の若い先生方は、情報機器に



で、段ボールを使い思い切り遊ぶ造形活動から、段ボールの特徴を生かして作りたいものを作る学習へと展開しました。

堪能である。研究授業も国語



分の得意分野がなによりです。」と申し上げた。その実践は、別紙にて報告が予定されているとのことである。授業者自身の「自分らしく自己を表現していく力の育成」になつていればいいなと感じている。
(深堀郁夫)

学習の途中に設定した「ちょっと聞いてタイム」では、友だちの工夫の良さを知ったり自分の課題を解決する糸口を見つけたりしながら、自分の制作に取り組みました。そして、子どもたちのうさぎランドは、制作を進めるうちに友だちの表現のよさや自ら気づいたアイディアを取り入れ、最初の設計図からどんな形を変えていき、学習の終わりで一人一人が満足のいく作品へと作り上げられました。これから、研究会でも出された中間鑑賞のあり方等、残された課題についての研究を進めていきたいと思っています。
(滝澤広子)

本校の宝④7 井上小学校

ソメイヨシノと大イチョウ

井上小学校は、井上、九反田、幸高、米持四カ村で創立した「道生学校」と福島村の「福島学校」及び中島村を含む「勸義学校」が合併してできた井上尋常小学校を創立の起点とし、百三十年余の歴史を誇る。校章は、桐の紋章で、その由来は、謡曲「柏崎」の一節「……桐の花咲く井の上の、山を東に見なして……」にちなんだものといわれ、この井上の地が古来より大笹街道と北国街道が交わる交通の要所として栄えてきた一つの証を今に伝えている。



また学区は旧井上氏が山城を構えた大城、小城の麓に広がり、豊かな自然や果樹を中心とした耕地に恵まれ、鮎川での生活科学習や果樹栽培の体験学習など特色ある教育活動を支えている。

本校の校庭周辺の桜の木々は、花の時には雪残る五岳を背景に、素晴らしい景観を見せている。二十本を超える木々は大半が記念樹であり、樹勢もあって美しい花を付け、春には子どもたちを外遊びに誘う。花の下での



また、校庭には子どもたちのお花見給食」は年中行事になつている。花の時期には地域の方も訪れ植樹の頃の思い出を懐かしく語り合う場にもなっている。

また、校庭には子どもたちのお花見給食」は年中行事になつている。花の時期には地域の方も訪れ植樹の頃の思い出を懐かしく語り合う場にもなっている。

(唐澤久樹)

火ばら 談義



小布施中
藤本信彦

自分を見つめ直した21日間の冒険

竹内しのぶ

以前、まだ二十代の時に、自転車旅行をしたことがあります。アウトドアの会社が企画した21日間、自転車で移動しながらその間に登山や滝登り、岩登りなどいろいろな困難に立ち向かい、自分を見直す、という旅行です。

偶然この旅の企画を知り、何だかどうしても参加したくなり、周りの先生方に多大な

迷惑をかけ、チャレンジを決めました。(今思うと信じられない。参加自体が最大の困難だったかもしれない。)

そしていよいよコースが始まり、思った以上に大変な内容に戸惑いました。今まで体験したことない体の疲労、そして過酷な生活……ずっとテント生活で雨は降るし、お風呂は十日間も入らないし……特に自転

車での長い上り坂では、走りながら自分の体がどうにか耐えてしまいたいという苦しい……。

でも、『自分でやるしかないんだ』と思えた時、相当がんばれる自分を発見することが出来たように思います。出来ないと思い込んでいたことを自分の力で出来ていくことの喜びは次へのエネルギーに変わっていききました。

時が経ち、体の苦しさや大変な思い出は忘れても、自分自身の中に大事な想いが残っています。仲間もでき、自分について考える時間も十分あった。あの時この旅に参加することができ、本当に良かったと思う、今日このごろです。(小山小)

一年に一度

那須野 裕

この季節(晩秋から初冬にかけて)は楽しい野外活動が一段落し、ゲレンデに雪が積もるまでやや暇になる。すると何故か料理に挑戦したくなる。学生時代に食堂でアルバイトをしていたこともあって、中華鍋から出る音や油の匂いが妙に懐かしい。これまで評判よかった料理もあるが、男の料理はあまり家族に評判よくない。それは、油っこいものであったり、一回のためにたくさんの食材や道

具をそろえてしまったりするからであろうか。確かに一、二回しか使っていない調味料や道具が冷蔵庫や流しの下を占領している。悲しいことに一度食べたらリクエストがない。

また今年もこの季節がやってきた。春先に石焼鍋を使った料理を番組で見てレシピをメモしておいた。問題は石焼鍋である。すでに石焼鍋を買いたいと話した時点でこの料理は反対にあっている。その反対を押

し切って買って作ってもいいだろうか。そう思うと今ひとつ踏み切れない。

そんなことを思いながら日曜日に新そばを食べに北志賀へ行った。新そばとはこんなにも弾力があっておいしいものかと思った。食べ終わって満足した頃、ふと言ってみた。「家でもそばを打ってみるか。」そばならいいんじゃないの。家にめん棒や台があるから。「意外な答えに思わず喜んでしまった。次はそば打ちにしよう。あとはそば粉をこねる道具があればいい。職人が使いそうな道具が急にほしくなった。(旭ヶ丘小)

選択教科での地域参加

井口 正敏



本校の選択教科の体育では、発展的な学習内容を位置づけている。将来地域でプレイする可能性が高いスポーツの実践を通して感じて

きたことは、地域のスポーツに直接かかわることができないだろうか、ということだ。中学生が地域の行事等から足が遠のくようになってきている。以前に先輩の先生から「中学生を地域行事に参加させる近道は、中学生に企画・運営を任せること」と教えていただいた。教育活動の延長で何か無いものか……。

本年度、容易にそのチャンスが訪れた。教育委員会から初めて、村民体育祭への生徒の協力依頼がきたのだ。マンネリ化した競技の再考と競技運営が主な内容だ。迷わずに『選択体育』で引き受けた。

村民体育祭という、二〇種目にわたって村内二〇地区の対抗戦が真剣に繰り広げられる一大イベントである。参加村民は二千人になる。やり甲斐も責任も大きい。

五月、十八名の生徒の構成で、競技の練り直しを扱った出場年齢を考えて実際に動き



ながら、また道具の配置や数を割り出しながら、分担競技を一新したり工夫を加えたりした。確かに任せられると意気込みも違う。アイデアが生きることから意欲も喚起された。村の体育指導委員会の決定を受け、スタッフを配置し、委員の方との打合せを九月の授業時に行い、開催に備えた。

十月九日、体育祭当日、村の方の溢れるエネルギーと笑顔、豊かで確かな繋がりのなか、盛大に体育祭が行われた。各競技のスタッフとして生徒が役割を遂行したのはもちろんである。一人の生徒の母親が「昨夜は気持ちが高ぶって寝付きが悪かったようです。楽しみでもあったようです」と話してくれた。意気に感じて取り組んだことに加え、行事を支える裏方の仕事の大切さを学び、自分と地域との繋がりを深める貴重な機会となったことに嬉しさを感じる。(高山中)

編集後記

会報二〇三号の発行にさいし、各学校にご協力頂きありがとうございました。感謝を申し上げます。